

編集後記

ここに東アジア世界史研究センターの『年報』第4号をお届けする。今年度は、それまでに開催された研究会の成果が蓄積されたこともあって、それを前回の『年報』3号として発行したため、本『年報』は、年報という名からすれば、あるいは少し違和感があるかもしれないが、本年度二号目の発行ということになった。

オープン・リサーチ・センター整備事業として、私たちのプロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」が採択されて3年目が終わろうとしている。本センターでは、プロジェクト開始当初から、日本から唐への留学生を基点として、さらにそれを東アジア、つまり朝鮮半島・日本列島などの地域に存在したであろう留学生を対象を広げ、その留学生について、それぞれの地域の国家が、それぞれの社会の如何なる人物を派遣したのか、その目的は何で、実際に各地域にもたらされたものは何であったか、その交流によってそれぞれの社会はどう変化したのか、などの論点を具体的に見つめることで、東アジア世界史を新たに構造化できないだろうかとの問題意識もっていた。それは第1回シンポジウムの討論において展開された、東アジア世界史の有効性の有無、あるいはその有効性において留学生の果たした役割は如何なるものであったのか、といった論点、ならびに昨年度の第2回シンポジウムでの、唐を中心として各国に放射線状に伸びる線の上での往復運動（冊封体制や留学生の流れ）と考えられていた従来の東アジア世界史論に対して、留学生を出す側の間（「東夷」間）での交通を（これを担った者も留学生として）問い直すことが、新たな東アジア世界史の有効性を見出す可能性をもっているのではないか、との研究の方向性の議論へと展開している。今回は、中核（唐）・周辺（新羅）・縁辺（日本）という新たな提言も議論された。その意味でも、今年度も一貫した視角で研究を継続することができた。

本誌に掲載されている第3回公開講座の講演は、留学生の具体像の構築とその評価を追究したものと位置づけることができる。またこれも本誌に掲載されている第3回シンポジウムの諸報告と討論では、東アジア世界史像に関してのいくつかの提起がなされ、それらは今後の本プロジェクトにおいて深めていかなければならない課題となった。

その課題を検討するに当たっても、また地域間交流の具体的な研究に当たっても、本プロジェクトのホームページ上に、一部分ではあるが公開できた「古代東アジア世界史年表」が有用性を発揮することを私たちは密かに願っている。

ともあれ、昨年度の研究成果をもとに定めた私たちの研究プロジェクトの方向性に、真正面から取り組んでいただき、本年度の第3回公開講座の講演、第3回シンポジウムの報告を引き受けていただいた諸先生に、この場を借りて感謝申し上げたい。また当日参加していただいた皆さんにも、多くの質問を寄せいただき、討論を活発なものにさせていただいたことに対して、お礼を申し上げます。さらに既刊の『年報』3号に掲載した研究会の報告者・参加者にも、本センターが研究者間の研究情報交換の場として少なからず機能したことを報告するとともに感謝申し上げます。あらためて、この『年報』に対しても、またこの研究プロジェクトに対しても、忌憚のないご批判をお寄せいただければ幸いです。

来年度は、本研究プロジェクトも後半に入ることになり、この方向性からの議論をまとめる段階となります。公開講座・シンポジウム・研究会へのご参加をよろしく願いいたします。

末尾になりましたが、本誌にご寄稿いただいた馬一虹氏は、3月5日にお亡くなりになりました。先生に感謝申し上げるとともに、この場をお借りしまして、謹んでご冥福をお祈りいたします。

(飯尾秀幸)